

2020年7月の大気大循環と世界の天候

大気大循環

500hPa 高度をみると、北半球の極渦の中心はグリーンランドの東に位置した。北極付近、日本の東海上、アラスカの南海上、北米北東部で正偏差、ヨーロッパ北部、日本の西、北米北西部で負偏差となった。200hPa 風速をみると、亜熱帯ジェット気流は中央アジア～日本付近では平年と比べて南寄りを流れ、中央アジア、朝鮮半島付近で南に蛇行した。寒帯前線ジェット気流はユーラシア大陸北部で明瞭だった。海面気圧をみると、北極付近で正偏差、ヨーロッパ北部、北太平洋中緯度帯の中部、カナダ中部で負偏差となった。太平洋高気圧は平年と比べて南西への張り出しが強かった。850hPa 気温をみると、北極付近、バイカル湖の東、北米中・東部で高温偏差、ヨーロッパ北部、中国東部～日本付近、アラスカ北部で低温偏差となった。

熱帯の対流活動は、平年と比べて、西アフリカ～インド洋熱帯域の西部で活発、北太平洋熱帯域の西部～中部太平洋赤道域で不活発だった。赤道季節内振動に伴う対流活発な位相は、上・中旬にはアフリカ～インド洋西部に位置し、下旬はインド洋からインドネシア付近を東進した。対流圏上層では、太平洋熱帯域の西部で南北半球対の低気圧性循環偏差、大西洋熱帯域～アフリカで南北半球対の高気圧性循環偏差となった。対流圏下層では、大西洋熱帯域で南北半球対の低気圧性循環偏差、インド洋熱帯域の東部～太平洋熱帯域の

西部で南北半球対の高気圧性循環偏差となった。海面気圧は、赤道域では、太平洋の西経160度以東を除いて負偏差となった。南方振動指数は+0.5だった。

世界の天候

世界の月平均気温偏差は+0.39℃(速報値)で、1891年の統計開始以降、7月として4番目に高い値となった。7月の世界の平均気温は、上昇傾向が続いており、長期的な上昇率は約0.71℃/100年(速報値)である。

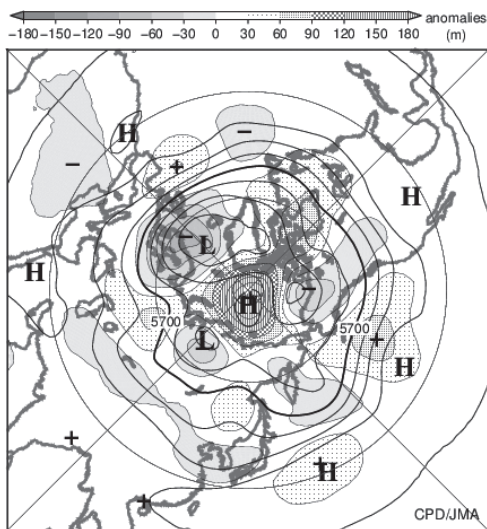
主な異常天候発生地域は次のとおり。

- 中央シベリア北部～スバル諸島、中国北東部、中国南部～東南アジア北部、インド北西部～パキスタン南部、中東中部及びその周辺、ヨーロッパ南西部～北アフリカ西部、北米東部～南部、南米北部及びその周辺、オーストラリア東部～南東部、オーストラリア西部～南西部で異常高温、中国東部及びその周辺で異常低温となった。
- 東日本～中国東部、西アフリカ、米国南東部～カリブ海諸国で異常多雨、ヨーロッパ中部～西部で異常少雨となった。

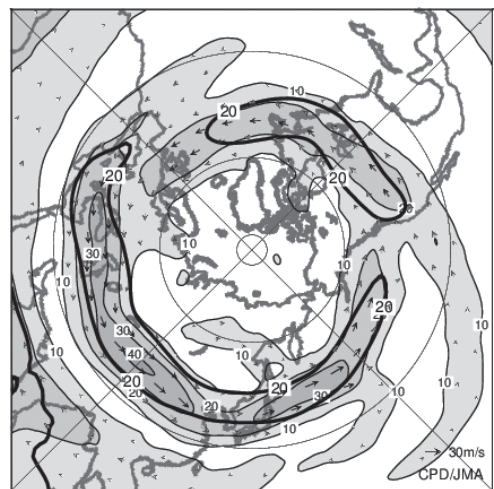
(気象庁 地球環境・海洋部 気候情報課)

※ より詳細な情報については、気象庁ホームページ「気候系監視速報」をご覧ください。

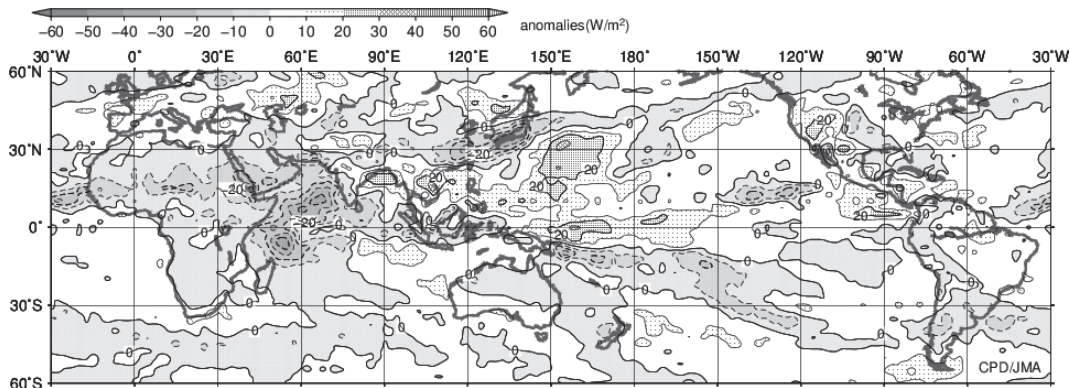
<https://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/diag/sokuho/index.html>



2020年7月の北半球月平均500hPa 高度及び
平年偏差
等値線間隔は60m。陰影は平年偏差。平年値は
1981～2010年の平均値。

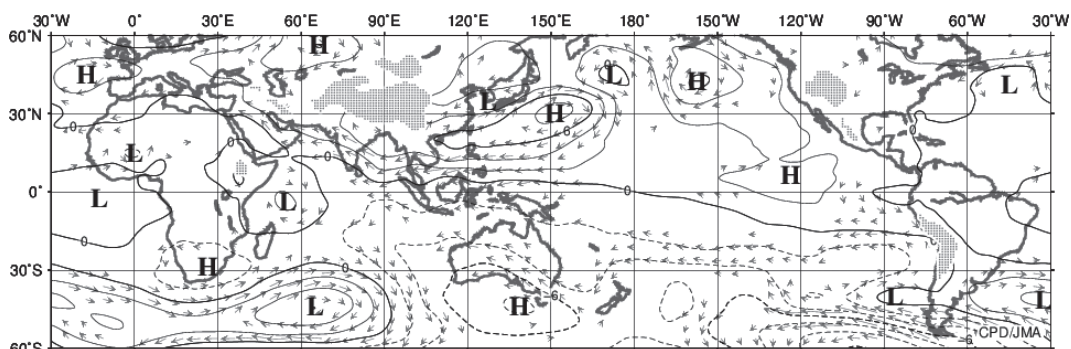


2020年7月の北半球月平均200hPa 風速及び
風ベクトル
等値線間隔は10m/s。太実線は平年の風速で等値
線間隔は20m/s。平年値は1981～2010年の平均値。



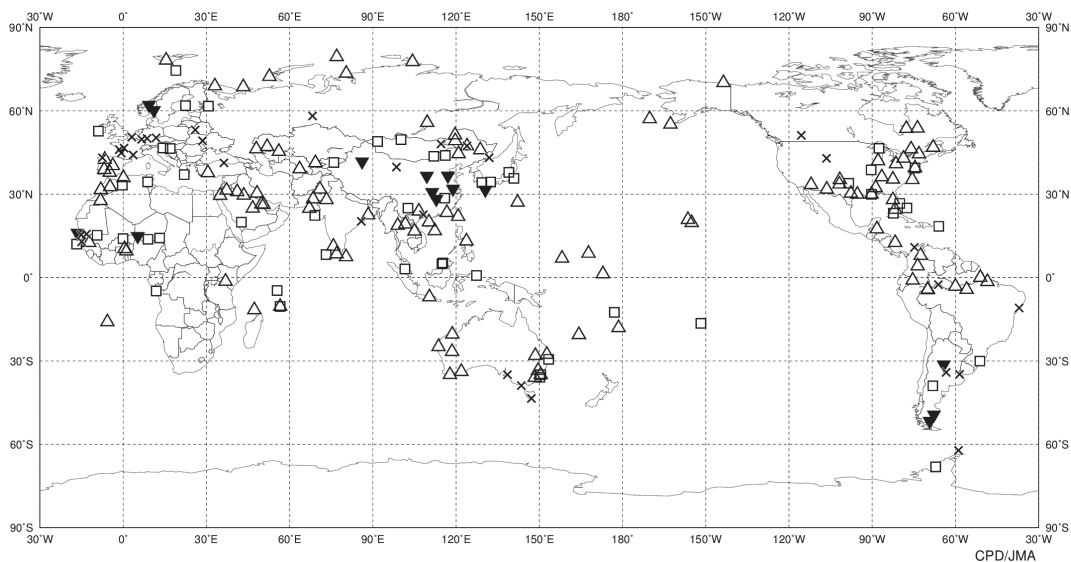
2020年7月の月平均外向き長波放射量年偏差

等値線間隔は 10W/m^2 で、値が小さいほど対流活動が活発であったと推測される。米国海洋大気庁（NOAA）より提供されたデータを用いて作成。年偏差は1981～2010年の平均値。



2020年7月の月平均850hPa 流線関数年偏差及び風年偏差ベクトル

流線関数の偏差の等値線間隔は $2 \times 10^6\text{m}^2/\text{s}$ 。年偏差は1981～2010年の平均値。



2020年7月の世界の異常天候分布図 △異常高温 ▼異常低温 □異常多雨 ×異常少雨
異常高温・低温は標準偏差の1.83倍を超える場合、異常多雨・少雨は降水5分位値が6及び0。